

◆寄贈書案内

●樋口兼次名誉教授より論文掲載書籍



書名：時代へのカウンターと陽気な夢—労働運動の昨日、今日、明日
編集：小野寺忠昭・小畑精武・平山昇（共同編集）
発行：2019年5月10日・社会評論社刊

本書の第5章に樋口先生が「関生型中小企業労働組合の「産業政策」闘争—生コン産業における中小産別労働組合と事業協同組合の共闘」と題する論文を掲載しています（332頁～347頁）
所蔵館：本館

●岡田晴恵先生より著書



書名：感染症カルタ—うつる病気の秘密
企画・編著：岡田晴恵
作画：オカダマキ
制作：奥野かるた店

感染症の第一人者によるアクティブ・ラーニングのための教材
収蔵館：大行寺分館

◆大行寺分館を救った学生たち

昨年10月の台風19号（令和元年東日本台風）による大雨で、大行寺分館は地下が約30センチ、1階が約5センチの浸水被害を受けました。当日は大行寺キャンパスに避難してきた近隣の本学学生約百名が、浸水の始まった図書館から本を守ろうと、駆け付けた職員の指揮のもとで所蔵図書はもちろん、ワークステーションのパソコンや電子黒板を2階へと運び、被害を最小限に食い止めました。

自らの避難よりも図書館を優先させた学生たちの愛校心あふれる行動のお陰で、その後の復旧作業も順調に進み、2週間余りで2階部分の仮オープン、12月には1階のワークステーションのオープン、そして今年1月6日にはグランドオープンを迎えることができました。これもひとえに台風当日に避難してきた学生たちの尽力の賜物と、あらためてここに感謝する次第です。学生の皆さん。ありがとうございました。



《現在の様子》

●網野友雄先生より著書



書名：バスケットが身につく88の発想
著者：網野友雄・小谷究（共著）
発行：2019年5月12日・東邦出版刊

本学男子バスケットボール部監督にして元日本代表選手によるバスケット上達のためのガイドブック
所蔵館：本館・大行寺分館

●高橋美保先生より著書



書名：食育の力—子どもに受け継がれる生活の知恵—
著者：高橋美保
発行：2009年10月20日・創成社刊

子どもが健やかに育つために必要な基本がわかりやすく書かれています
所蔵館：大行寺分館

令和2年4月1日 発行
編集 図書館だより編集委員会
発行 白鷗大学総合図書館
〒323-8586 栃木県小山市駅東通り2-2-2
ホームページ <http://hakuoh.jp/library/index.html>
印刷 第一印刷株式会社

本と私 —灰色熊と鯉とナマズの日々—

名誉教授
市川千秋



はるか昔の7月の暑い日、薄暗い書庫の古い机で父の『シートン動物記』を読んでいた小学校6年生の私。「ちーあっくん」と友達の呼ぶ声。「昨日からトッポシだから、第六天の下の川で鯉が跳ねてるよ」

7月のどこかで、川を突然止めて田んぼを干し、稲を驚かせて実の付きを良くさせるのです。直ぐに本を閉じて神社の近くの川で鯉やナマズと格闘したい。でも少年には分かっているのです。魚網を持つ手をとめて青い空と白い雲を見上げたとき、必ず読みかけの本が気になります。動物記のあの灰色熊はどうなっただろう…。

それならばと、魚とりはあきらめ、かび臭い蔵の中でそのまま本を読み続けていても、窓越しに夏の青空と白雲をながめると、鯉やナマズの跳ねている姿が浮かびます。まして遠くから友達の歓声が聞こえてくると居ても立ってもいられなくなります。どちらを選んでも、心のどこかでもう一方の楽しさが後悔となって目をさますのです。



早く母親を亡くした少年に本は友達でした。代々、本好きの家系で、漢籍、日本外史、和漢朗詠集、江戸の医学書、明治・大正の頃の大学の教科書、南方熊楠研究。書庫には多くの蔵書がありました。どれも全く理解できませんでしたが、読めそうな本を開いて眺めていました。蔵の中は少年には空想の世界、ワンダーランドでした。

育ったのは東京の郊外の片田舎。豊かな自然の中で村の行事は少年の心をゆさぶります。繭玉、どんど焼き、初午、トッポシ、風祭り、秋祭り、落ち葉かき。こちらはまさにリアルワールド。季節の移ろいと村の生活が潤いをあたえてくれました。

長じてこの職業を目指した日々、読むべき本や専門誌が山と積まれても、心のどこかで、あの青空と白雲が呼んでいました。

そして人生の締めくくりに思いを馳せる今。部屋で認知症の本などを読んでいる私。「ちーあっくん」と老友の呼ぶ声。「新しいスナックができたから、飲みにいこー」

*イラストは全てフリー素材を使用した

白鷗短大図書館の思い出

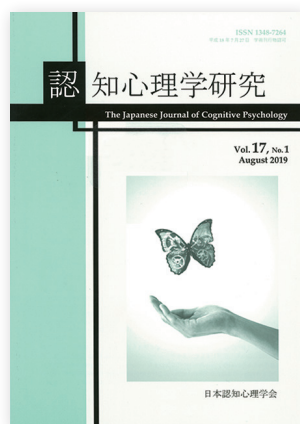
名誉教授
神戸 文 朗



私の白鷗の図書館への一番の思い出は1980年代後半から1999年までの短大図書館に関するものです。当時は今より若いだけあって少しは勉学意欲があったのでしょうか。認知心理学に関する主要な雑誌を図書館で購入してもらいました。そこで毎月短大の3階にあった図書館に行って、4誌か5誌の目次情報をたよりに自分の関心のある領域の論文を選んで、そのアブストラクトと論文をコピーしていました。夕方人気もなくなり寂しい雰囲気の中でコピーしていたことを思い出します。自宅に帰った後、論文をコード化し、それに対応した著者カード、アブストラクトファイル、論文ファイルを作成しました。なんともアナログ的な方法です。今ではそのような作業をもっと効率的に行えるソフトウェアもあるようですが、我が家の書棚はそれらファイル類で一杯になりました。実際のところほとんどは分類しただけで終わり、読んだ論文の数は多くはありませんでした。

しかし歳を重ねるとともに、勉学意欲の衰えもあるのでしょうか人の主張をよく知ろうとするより自分が今感じている疑問を明らかにすることを重視するようになりました。そんなわけでファイル作成作業は徐々に下火になり、現在論文作成にあたって個別の現象の解釈は論文検索用のデータベース（主として、PsycINFO）からの情報を多用しています。その後、雑誌や図書類は短大図書館から大行寺キャンパスの大学図書館に移管されました。でも2015年の洪水によって30年近く蓄積されてきた雑誌類はあっという間に水の泡となっ

てしまいました。これから再び雑誌類は蓄積されていくでしょうが、はなはだ寂しくも残念な出来事でした。そうは言っても私の知識の根幹をなしているのは昔書棚から取り出して読んだ論文といえるでしょう。つまりどうしても私が研究の論拠や実験結果の解釈として引用しようとするのは今では最新とはいえないようなこれらの論文類です。まさに少年のみならず人は老い易く、学は成り難いものですね。



読書会の“知の化学変化”に期待したい

名誉教授
的 場 哲 朗



読書というと、“読書会”が思い浮かぶ。僕の読書会は大学2年次に恩師上妻精先生の、「哲学書を読むには学生同士で読書会をするといい」という言葉に背中を押され、有志五・六人が集まってカール・レーヴィットの論文「西と東の差異」をドイツ語で輪読したことにはじまった。入学早々大学院進学を公言し、ドイツ語もよくできたK君をリーダー格に据えて文法や翻訳や思想について喧々諤々の議論に熱を上げた。熱を上げすぎて大学の授業を素通りして一同喫茶店に直行しウェーバー、ハイデガー、ヤスパース、フッサールなどを読んだ。閉店時間になって喫茶店を追い出されたが、どうしても残りの数行が読みたいと自動販売機の明かりの前に蛾のように群がって本を読み合わせたこともあった。仲間の鼻を明かしたいと自宅では『精神現象学』や『存在と時間』などの大作に必死で取り組んだ。どこで噂を聞いたかわからないが、他大学の学生や大学院生まで

もが読書会に参加し、僕の知識欲は否が応にも刺激された。今思えば、悶々とした青春の情熱をぶつけ合っただけだったが、あの多感な時期に読書会に巡り合えた幸運に感謝の思いは尽きない。図書館には膨大な書籍が整然と並んでいる。しかし、それだけでは図書館は、いや大学の講義も含め、まだ冷たい“知の冷凍庫”にすぎない。この冷たい“知の冷凍庫”を解凍して温かい、血の通った知識にもどすには“加熱器の炎”が必要なのではないだろうか。図書館に一人籠り黙々と本と向き合う読書の喜びを否定するつもりはないが、しかし読書会という青春の炎の“知の化学変化”には期待したい。そんな思いで、本学に奉職してからも毎週木曜日に読書会を続けてきた。——この炎だけは消したくない。

